

態で、世を去ったのか、今も尚ほ詳かにしない。生前辻君を知った多くの人々は、大ていは彼の最期に就て知ること私と同程ではなかつたか。時期も時期だが、彼の人が、かうした結末を彼の生涯に齎らしたとも言へる。唯だ私は彼の大往生の様を親しく目撃し得なかつたことを些か口惜しく感ずる。それは、この騒乱の世に対する彼の真の生き方を察するに最も善き方便だつたであらうから。そして今の世に処する一筋の真実の道が自ら示されたに相違ないと思はれるから。

## 新居格君を想ふ

甲府の友人に招かれて同市に行くべく中央線の列車中の人となつた、「昭和二十六年」十一月十六日の朝、わたしは『読売新聞』を開きながら、突如として大きなショックを受けた。そして「新居君が死んだ！」と叫んで、その記事の載つた新聞面を同行の川合仁君に見せた。川合君も驚いた。しかし、われわれは驚きはしたが、全然予感しなかつたことではない。

最初、『アフランシ』紙上で、新居君が脳溢血で倒れた、といふ記事を読んだ時は、手紙もやれなしいし見舞もできない、といふので時機を待つてゐたが、間もなく新居自身の手紙が載つたので、わたしは直ちに一書を送つた。ところが、それに対する返事が、いかにも寂しそふであり、訪問を希望してゐるやうに見えたので早速行つて見た。不幸にして其時新居君はゐなかつた。一時間余り待つ間に、女中さんが諸方に電話してくれたが、遂に所在がわからなかつた。その翌々日にハガキが来た。

「折角の御来訪、わたくしは、どんなにお目にかゝりたかつたか分らないのに。それを女中に言つ

て置かなかつたのは、この上もない手落でした。

あなたのいわれる通り、自由思想の種を蒔くのに、と申すよりは、蒔かねばならぬ時機です。わたしは今のところ廃人に等しいけれど、いま一度、動けるようになれましたならば、同志の驥尾に附して努力したく思います。」(以下省略)

それから、近代学校創立のことを申し送ると、すぐに返事が来て、

「近代学校、時機に適せる御発想として大賛成です。わたくしも講師に御加え下さること光荣に存じます。

身体も追々よくなりました。今しばらくすると出歩けることかと存じます。

……中略……

表記は娘の建てた小屋です、こゝで静養中です、阿佐ヶ谷の駅近くオデオン座の裏の方です」

と書いてある。わたしはこのハガキを見て、これは訪問を希望する文句だと感じ、すぐに御見舞した  
いと思ったが、次ぎつぎに起る用事に妨げられて、その意を達せずにご経過してある間に、思いもよらぬところで計報に接したのである。しかも東京から離れて行く、列車の中で君の逝去を知ったのである。われわれは甲府に就くや否や、直ちに連名で、令嬢ロンス子さんに弔電を送りはしたが、親し

い最後の会談を逸した未練がいつまでも心に残る。



わたしが新居君と初めて会つたのは、たしか最初にヨーロッパから帰つて帝大の大講堂で一席講演した時であつたと思ふ(大正九年)。それから最後の日まで、或る時は些か遠く、或る時は手を携へて、互いに並行線上を歩んで来た。わたしは一つのこと執着する人間であるが、新居君は自由闊達に思ふところに活動の舞台を展開する人であつた。まことに自由自在なアナキストであつた。区長さんになつたり、ユネスコの運動に率先したり、どこへ行つても人氣ものであつた。アナキストとしては少々変態にも思はれやうが、彼に於ては、それは問題でなく、常に融通無碍で、常に水の流れる如く進展するのであつた。

曾て関東大震災の直後、一切の社会運動が痕跡をも留めなくなつた時、われわれがフェビヤン協会を創立したことがある。それを最初に計画したのは山崎今朝弥、新居格、の両君と私とであつた。それから暫らくたつて一方に日本の軍閥が漸く反動的勢力を展開し、他方に日本の社会運動が悉く強権的政党運動に競つて赴いた時、自由主義同盟を創立したが、その時もこの三人で話し合つたのであつた。この自由主義同盟は前のフェビヤン協会のやうに盛大にはならなかつた。その理由をいま明確に思ひ出せないが、日支事変が勃発した結果、かうした運動を展開する余地がなくなつた為だつたと思ふ。右の三人で尾崎行雄老を逗子に訪問したこともあつたが、それも、この自由主義運動のため

あつた。

新居君の思ひ出は尽きない。彼は度々私のことを新聞に書いた。そして、いつも私の生活と思想とに共鳴してゐた。彼自らはサロン・アナキストと称してゐたらしい。趣味のアナキストとでも言ふべきか。アナキズムの好きな友人であつた。賑やかな、ほがらかな、そして力づよい応援者であつた。いま彼の逝去を思ふと、わたしは限りなき寂しさに包まれてゐる。それは単に個人的関係にのみとづく感情ではないのである。

## II